

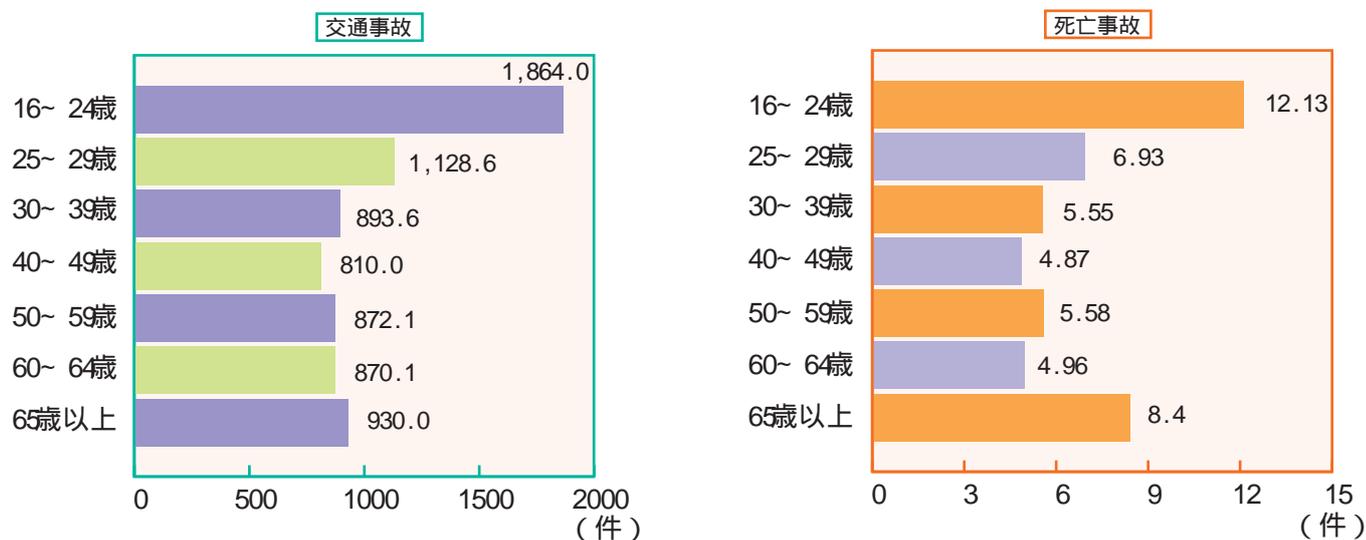
8月の安全運転のポイント 平成20年8月号

今回は、最も事故発生率の高い若年ドライバーについて、その特性や事故防止のポイントについて考えてみることにしましょう。

若年ドライバーの事故発生率が高い

図1は、年齢層別免許保有者10万人当たりの交通事故および死亡事故件数を示したものです。左側の交通事故では、16～24歳の若年ドライバーの事故発生率は、30歳以上の年齢層の2倍以上の発生率です。つまり、この年齢層の若年ドライバーが最も事故を起こしやすいということです。

図1 原付以上運転者（第一当事者）の年齢層別免許保有者10万人当たり交通事故件数（平成19年中）
（警察庁交通局、平成19年中の交通事故の発生状況による。）



若年ドライバーの特性

運転経験が浅い

若年ドライバーは運転経験が浅いということがあげられます。

そのため、運転中に、危険な状況を正しく認知し、的確な判断をすることが、経験不足などにより、正しくできないことが考えられます。

運転は、「認知・判断・操作」によって成り立っており、そのどこかにミスが発生すると事故に結びつくといわれていますが、若年ドライバーは、そのいずれについても不十分な面がみられます。

運動能力が高く、実力を過信しやすい

若年ドライバーは他の年齢層に比べると、運動能力や視力などの身体機能は優れています。しかし、一方でそれが過信につながることもあります。

運転経験が浅いにもかかわらず「自分は運転がうまい」「事故を起こすわけがない」と思い込み、スピードの出し過ぎや強引な追越しなどの危険な運転に結びつきます。



事故防止のポイント

運転は社会的行為であることを自覚しよう

車の運転は、個人的で趣味的な行為ではなく社会的な行為です。ドライバーが守らなければならないルールがあります。ルールを破れば、安全は確保できません。



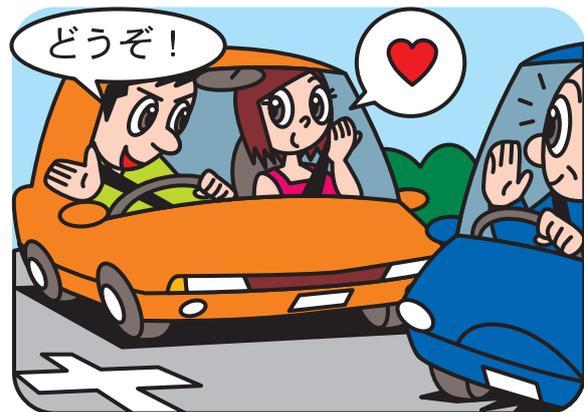
万一、事故を起こせば被害者を悲惨な状況にさせるだけでなく、運転者も、被害者への損害賠償義務を負ったり、懲役や罰金、免許取消し等の処分を受けることになります。そのことをしっかりと自覚してハンドルを握りましょう。



他車や自転車、歩行者は「交通パートナー」という意識を持つ

自分の思い通りに走れないからといって、感情的な気分になると、強引な追越しなどの無謀な運転を招きます。他車や自転車、歩行者は、同じ道路を利用する交通パートナーだと考えましょう。

それによって、相手に配慮した運転や、譲り合いができるようになります。



危険な状態を作らない運転を心がけよう

自分の運転能力を過信すると、危険な状態になってもブレーキやハンドル操作で回避できると考えがちです。

確かに、状況によっては、急のつく操作で危険を回避しなければならないケースも生じますが、急のつく操作は事故を招く行為であるとともに、急のつく操作が必要な運転をすること自体が問題なのです。

適正な車間距離をとる、スピードを抑える、危険を予測するなどにより、急のつく操作が不要な運転、危険な状態を作らない運転を心がけましょう。



「ご相談・お申込先」